

# 千葉県小児歯科医会「県民公開講座」のご案内

—◇千葉県歯科医師会、千葉県小児歯科医会 共催：[平成 23 年第 7 回学術講演会]—  
(千葉県、日本小児歯科学会後援)

【日 時】 平成 23 年 5 月 29 日 (日) 午後 1 時～4 時 10 分

【場 所】 ホテルニューオータニ幕張 2 階宴会場

## 【講演 1】 『食物アレルギーの診断と治療：最近の動きについて』

講師 河野 陽一 先生 千葉大学大学院医学研究院小児病態学 教授

食物アレルギーの有病率は、日本では乳児で 5-10%、学童以降では 1-2%と考えられているが、その治療法について最近新たな展開がみられる。食物アレルギーの治療として、経口負荷試験により同定された原因食品を摂取しない除去食療法が従来行われてきた。除去食療法では原因食品を摂取できる耐性獲得までに時間がかかり、また栄養障害や治療達成の不確実性などの問題もあることから、原因食品を適量経口摂取することにより耐性を獲得させる経口免疫療法が提唱されるようになった。特定の食品を摂取出来ないことは、栄養不足のみならず集団生活における問題にもつながる。そこで比較的短期間に耐性が獲得出来る経口免疫療法は、診療上のニーズが高い。しかし、その効果および安全性については未だ検証が十分でなく、この点について最近全国レベルでの調査が始められた。

食物アレルギーの診断および治療について最近の動きをまとめ、また食物アレルギーと関連して母乳とアレルギーについての我々のデータもご紹介したい。

## 【演題 2】 『歯の萌出に合わせた離乳食と幼児食の考え方』

講師 朝田 芳信 先生 鶴見大学歯学部小児歯科学講座 教授

現在、子どもを取り巻く環境の変化が大きくなっているにも関わらず、社会的ネットワークは脆弱であり、家庭、学校、地域社会が連携した育児支援が急務と言われています。歯科医療においても、子育て環境の変化と口腔疾病との関連性が注目されています。2005 年の歯科疾患実態調査によれば、子どものむし歯は減少ならびに軽症化に向かっていますが、一方で、地域性や家庭環境の違いによるむし歯の重症化も目立っており、むし歯の二極化が問題となっています。さらに、生活習慣と深くかかわる歯肉炎は、低年齢児で増加傾向にあり、確実に成人型歯周炎の予備軍が増加しています。すなわち、むし歯や歯肉炎の発症は幼児期の食習慣と密接に関わることから、幼児食の進め方は大切になります。しかし、母子健康手帳には離乳完了、幼児食や歯の健康と歯みがきの記載はありますが、子どもの食育に重要な歯の萌出からみた幼児食の与え方の記載はみられません。そこで、日本小児歯科学会では、小児科との連携のもと、「歯からみた幼児食の進め方」について提言を行っています。また、不正咬合に関しては、下顎の前歯部の叢生と上顎前突が増加傾向にあります。上顎前突の増加の要因には、口腔習癖(指しゃぶりなど)や離乳期の問題が指摘されています。とくに離乳期中期から後期の離乳食の与え方については、歯の萌出状況を考慮する必要があります。そして、乳幼児期の不適切な食習慣は、咀嚼筋および機能の発達に影響を及ぼすことが基礎研究や臨床研究からわかってきました。離乳食から幼児食への進め方については、月齢を基準に与える食品を選び、それを摂取した時の便の様子で消化の程度を判断する母親が多いと思われます。栄養摂取という観点からは、しっかり消化されていれば、何を、いつ、どのように与えても問題はないでしょうが、咀嚼という観点からみると違った対応が求められます。「小児は成人を小さくしたものではない」といわれるように、小児期では全身の発育のみならず、口腔の形態および機能が大きな変化を遂げる時期です。とくに、咀嚼を学習するのは 1 歳 6 か月頃から 3 歳の間であり、この間に奥歯が生え始め、すべての乳臼歯が生えそろいます。したがって、子どもが食物を正しく噛むことを学習するためには歯の萌出状況に見合った幼児食の進め方が必要であり、その進め方に問題があると正しい咀嚼機能の獲得につながらない可能性が出てきます。

乳幼児期は母子の愛着形成や子どもの心の発達にとって極めて重要な時期であり、子どもの健全な成長のためにも、乳幼児をもつ保護者や育児支援に携わる方々には、是非正しい知識を持って頂きたいと思えます。本講演では、とくに「歯の萌出に合わせた離乳食や幼児食の考え方」について触れ、歯科からみた育児支援の在り方について述べさせていただきます。

【参加費】 2,000 円

お申し込み連絡先：千葉県小児歯科医会事務局（東京歯科大学小児歯科学講座内）

FAX:043-270-3947 TEL:043-270-3946